
魔法先生ネギま～悪の正義～

unlimited

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法先生ネギま～悪の正義～

【Zコード】

N1113Y

【作者名】

u n l i m i t e d

【あらすじ】

『正義』に絶望した少年は決意した。少年は自らの理想、自らの願いの成就のため『悪』である事を選ぶ。

オリ主チート原作＆原作キャラブレイク一部アンチです。
苦手な方はお戻りください。

プロローグ

プロローグ

SIDE とある夜のある少年の決意

『正義』だと・・・?

こんなものが『正義』だと言つのか

こんな、何の罪も無い人々を悪に仕立て上げ

力無き弱者を征服し

蹂躪し

略奪し

殺戮する

こんなことが『正義』だと叫ぶのか

赦さない

『正義』といつも免罪符としてを掲げる外道が

『正義』を掲げるもののよ、聞け

我はこれより貴様らの敵、即ち『悪』となつ

私は今宵、この時をもつて

アンコラード
『Jの世全ての悪』となるべ。

プロローグ（後書き）

ちょっと色々改変しました。“ごめんなさい”。
基本的に作者の妄想及び自己満足で話が進んでいきますので、了承
ください。

キャラ設定1

ルクス・アヴェスター

年齢数えで10歳

本作の主人公。

生まれつき膨大な魔力を持っていたが人形遣いとしての魔法以外殆ど使えず、物心ついた時から家にあつた出所不明の異世界の魔導書で魔術について学ぶ。魔法が使えないことに劣等感は無く、むしろ独学で覚えた自己流魔術しか使えない自分をもはや魔法使いだとは思っていない。

性格は温厚でお人よし、たまに空気が読めないことがある。だが裏では冷徹で残酷なところもある。

容姿は同年代のネギよりやや小柄で中性的な顔立ち。やや長めの茶髪と、翡翠色の瞳。ただし魔術使用時に一時的に銀髪、琥珀色の瞳になる。

趣味特技は器用な指先と独特的な魔術センスを活かした魔法道具及び自動人形の作成。

作成した魔法道具は一部だがまほネットで通信販売している。なお6年前にある事件に巻き込まれ両親と姉を亡くす。

備考

会話の上ではボケ3割ツツコミ7割。（自称）

今現在主に使用する魔術例

Gand本來は対象を人差し指で指差し、呪うことで体調を崩させる、といったもの。だがそのフォームゆえ「Gand撃ち」と呼ばれる。本

来は呪詛の様な物だが、魔力を収束させることにより物理的破壊力を持たせる事が可能。

強化魔術

物質及び肉体の強化が可能。ただし肉体強化は自身のみ可能。

投影魔術

魔力を用いて物質を作り出す。ただし生物は作れない。

魔眼変化

自らの眼を魔眼に変化させる。基本的にどんな魔眼にでも変化させられるが高位になるにつれ効果時間と肉体的負担が大きくなる。専ら使用するのは術式解析（魔力による結界呪詛のつくりを目視によって解析する）、靈視等である。

概念付与魔術

既存の物質や投影で作り出した物質に概念を持たせる。

魂の分割化

人型をしたものに自らの魂の一部を付与し、自らの自由もしくは自動で動く自動人形オートマタ

とする。人形が活動不能時には分割した魂は持ち主の下に自動的に戻る。

降霊魔術

あらゆる時代から靈魂を召喚し、任意の対象に降ろす魔術。傀儡とする際には人格等が邪魔になる可能性があるので基本的に降ろした靈のスキルと能力のみ上乗せされる。

転送魔術

予めそれ用の刻印を刻んだ物質を任意の場所へと転送する。生物の場合はその固体が一度でも行った場所に限り可能。

魔力貯蓄

魔力を自分の持ち物や肉体に貯蓄する。ルクスは就寝前にその日の余剰魔力を不可視の刻印状態にして肉体に刻み込んでいる。それと自作の装飾品や魔法アイテム等にも貯蓄している

魔力開放

武器・自身の肉体に魔力を帯びさせ、瞬間に放送出する事によって能力を向上させる。絶大な能力向上が得られるが魔力の消費が通常の比ではない為、今現在ではもつて10分程度である。

魔術発動時の自己暗示は『^{ゲットセッタ}術式開始』

キャラ設定1（後書き）

とつあえずこんな感じです。
魔術は基本的にf a t e系からパロッてます。
また色々と書き換えることがあるかもしちゃんでござ
い。

第一話

第一話

SIDE ルクス

はじめまして、皆様。ルクス・アヴェスターと申します。

突然ですが、この度めでたくメルディアナ魔法学校を卒業出来ました。

これで退屈な授業（）じゃなくて大嫌いな魔力）ゲフンゲフン、失礼
まーとりあえず今の環境からおさらばです。

でも自分でもよく飛び級で卒業できたなど驚いております。僕は魔法学校の人間ですが

魔法は一部を除いて殆ど使えませんし、色々な先生方が言つには少し性格が歪んでいるそうです。

でも座学や体術等の成績は主席だったようなので、その辺りを評価されたのかもしれません。

しかし眞面目に魔法使いとして学ぶ生徒達には僕の待遇は少し目に

余るものだつたのかもしません。

なんせ卒業式の時に僕の名前が呼ばれた瞬間にホール内の空気が一瞬凍りつきましたよ。

で、壇上まで卒業証書を取りに行くときの回りの視線が痛いこと痛いこと。ちょっと泣きやうになつたりならなかつたりしました。

そして証書を受け取つてから自分の席に帰るときなのですが、主席（総合評価）で卒業したネギ・スプリングフィールド君なんて僕をすごく睨んでましたからねー。そりやあ彼とは価値観の違いとかで時々衝突していましたけど、ここまで睨まれる事はないと思つんですけど。もしかして、一部の座学で主席が取れなかつたこと恨んでるんでしょうか？良いじゃないですか、僕なんて座学以外の魔法実技評価は殆ど赤点ギリギリですよ？

とまあ卒業式のことはこれくらいにして、僕は今学校の渡り廊下で卒業証書を眺めています。

校長の説明によると、授与後しばらくすると卒業後の修行場所が浮かび上がつてくるそうです。

ぶつちやけ魔法使いとしての修行はどうでもいいのですが、とりあえず学校の予算でここ以外の場所に行けるのなら儲けものです。

と、やつとつすらと文字が浮かび上がつてきました。えーと、何々・・・・・・

『日本で先生をすること』なんですかこれ？証書のバグでしようか？数えて10歳程度の子供が学校の先生だなんて・・・

とりあえず校長に聞いてくるとしましょうか

第一話（後書き）

自分で書いてなんですが
何、この主人公・・・onz

あと感想とかレビューとかくれるとうれしいです

SIDE ルクス

バグつている卒業証書を持つて僕は校長の下を尋ねました。

「校長先生―――、1Jの卒業証書バグつてますよ―――!」
校長の後ろから叫びました。すると校長の影になつていて分かりませんでしたが、他の生徒と話をしていたようです。
「、ネギ達だよ・・・。

僕は苦笑いをしながら校長に近づき、話をしていた生徒達に会釈をして校長との会話に割り込みました。

「で卒業証書がバグつているみたいなんですねけど、どうやらたらツセツト出来るんですか?」

僕は証書のあつちこつちを押しながら尋ねた。 その様子に校長はため息をつきながら

「卒業証書はバグらん！リセマートも出来ん！卒業証書に浮かび上がったことなら絶対じゃ……」

「マジで！？じゃあこれ考えた人って何考えて……ああ、そういうことね……」

「じゃあ、この修行内容考えた人がバグっているんですね。わかります」

僕は校長の顔を見上げながら笑顔でそう言った。

SHIDE 校長

卒業式が終わり、わしは校長室のほうへ帰るために渡り廊下を歩いていた。するとそこにネカネとアーニャ、少し遅れてネギがやってきた。

話を聞いてみると、修行内容のことのようじゅつだった。ネギは『田本で先生をすること』と出たみたいじゃ。』

「ほつ、『先生』か。だが、卒業証書にそう書いてあるのなら決まつたことじゃ。立派な魔法使いになるためには

頑張つて修行してくるしかないのう。まあ、頑張んなさい」と彼らに話していた。そこには……

「校長先生……」の卒業証書バグつてますよ……！」

ルクスがやつてきた。

ルクスはわしが振り返った時にネギの顔が見えたのでバツの悪そうな顔をしたが、苦笑いをしながらわしの下にきて

「で、卒業証書がバグっているみたいなんですけど、ビリやつたらリセット出来るんですか？」

「言いおつた。このクソガキ）いや、こやつめは・・・

わしはため息をつきながら「卒業証書はバグらん！リセットも出来ん！！卒業証書に浮かび上がったことなら絶対じやーーー！」と怒鳴つてやつた。

するとこやつは、意外そつな顔をしたあと何かに納得したように「じゃあ、この修行内容考えた人がバグっているんですね。わかります」

とのたまつおつた。口の減らん奴じやーーー

SIDE ルクス

校長に『修行内容考えた人バグつてる』と言つた後に気づきました。

“修行内容考へてゐるのは主に校長”だつとと申つ事に。

まあ、言つてしまつたことは仕方ないことです。笑顔で「まかす」とにします。

たまに空気が読めない発言をしてしまつるのは僕の悪い癖ですね。

笑顔での誤魔化しが効いたのか、校長は僕とネギを交互に見てから
こゝに言いました。

「二人がいく修行先の学園長はわしの友人じやから、安心してが
んばんなさい」

とまとめたその場からそくさと引いていきました。

つてネギも一緒なんですか？

何となくネギ達のほうに田を向けると、

微妙に機嫌の悪そうなアーニヤ

苦笑いのネカネさん

何かすすつじへ睨んでくるネギ

・・・

・・・・・

・・・・・

・・・・・・・・・・まあ、何とかなるかな？

SIDE ルクス

ネギの突き刺さるかのような視線を背に受けながら、僕はその場を後にしました。

学校の裏の山にある家に帰り制服と卒業証書を置き、僕は早速日本への荷造りを開始しました。

一応予定としてはあと二ヶ月近くあるみたいなのですが、二ヶ月後に行つてイキナリ先生＆日本での生活をやれと言うのは結構きついものがあるような気がするので、僕はネギよりも先に日本に行つてある程度の準備うんぬんを済ませて置こうと思っています。

例えば同じ日に一人で日本に到着して同じ場所で生活するに当たつて、二人同じ部屋で協力して生活する羽目になりでもしたら、胃に

穴が

開きかねません。ぶつちやけ一人暮らしでも結構大変だつたりするのに、甘えん坊で自分の「」ともままならないネギと一緒になると考えたら

それこそ悲劇ですよ。修行をすっぽかしてダッシュで逃亡するかもしません、結構切実に。

そんなこんな考えながら動いてる内に荷物の整理は殆ど終わつてしましました。着替えや魔法アイテムとその他材料、資料 etc は魔術で空間を拡張した旅行鞄に

全部つめ終わりましたし、大き田の家具等はこの家に置いていきますし、傀儡用の人形はあとで転送魔術で引っ張るとして、あとはまほネットの方の店を・・・

あ、その前に校長に先に日本に行けるように頼まなくてはなりませんでした。ちょっと行ってくるとしましょうか。

SIDE 校長

ルクスやネギ達が帰つた後、わしは麻帆良に送る用の一人の書類を

準備しておつた。すると突然校長室の扉が強く叩かれ直ぐに勢い良く開けられたのじゃ。

「度々すこませ——ん——ひょ——とお願いがあるんですけど———」

「返事があるまで待たんか——あと声が無駄にでかい——」

「はこ——5回田へりこから氣をつけます——」

「次から氣をつけんかい——」

わしは大声を出した後、ため息をついてから頭を抱えた。
それを見たルクスは「おや、お疲れですか？もう年何ですか？」
と自分はまつたく関係ないかのようにそつせざいた。

「——の疲れの原因はほとんビオヌシとのやり取りが原因じゃ——」

「そんなことよつづりしても頼みたいことがあるんです、校長先生。」

「

……話を逸らしあつてのべやがく・

——で更に怒鳴ると話が進まなくなつた。やから、——の話を聞いてやることにした。

聞いてみると日本行きを早めて欲しいことつじやつた。一応訳を聞いてみると、至極真つ当な理由じやつた。とりあえず、検討する

「やつ」と電話を終わらせるつと話した。じゃが・・・

「やつですか、じゃあいつ決まるか毎日挨拶ついでに聞きにきますね。」

毎日いつにこの調子で来られたら本気で体調を崩しかねん。じゃからわしは数日中には日本行きを決めてやるからと約束してルクスを帰らせた。

まったく・・・本当にやつかいな奴じやわい・・・。

次の日

SIDE ルクス

いや一数日中つて言つからー、二日は掛かると思つていたんですけどもう日本行きが決まるなんて思つても見ませんでしたよ。

校長もやるとおはやりますね。

校長の送つてきただ手紙によると日本での下宿先は先方がもう用意してくれてこひらしこですから向ひでの衣食住は心配しなくていいこりしこです。

それと向ひの学校の資料も貰いました。麻帆良学園ですか～写真で見る限りだとヨーロッパの町並みみたいですね～。とつあえず同封の写真や資料をわざと見ました。おや・・・むづ一枚封筒が・・・。

開封すると、明日出発の飛行機のチケットでした。

・・・何か早くないですか？まあ、早く行きたいと言つたのはこいつですから良いんですけど、こんなに速い仕事をされるとまるで僕にせつねといひから出で行つて欲しいかの様に勘違ひしてしまいますよ。

と、校長をそんなに悪く言ひのせ止めときましょ。寧ろこんなに早く決めてくれた御礼の手紙へりこ出しだましょ。

僕はそう思ひながら『開封した瞬間爆音でお礼の言葉を述べる、そして自動的に爆発して消滅する』手紙を校長宛に出すことにしました。

因みに僕が行つたあと、風の噂によると校長室のガラスが全損したらしいですよ。

麻帆良学園近郊の駅付近

SIDE ルクス

いやあ～まいっ たま いっ た。空港から最寄の駅まで行つたのは良かつたんですけど、ついうつかり乗り間違えてしまうとはー。
いやー三重県まで行つてやつと気づきましたよ～。赤福美味しかつたです、うん。

さつき学校側に連絡したら駅のほうまで迎えの人を寄越してくれるって言つてましたし、ベンチに座つて茶でも啜りつつ気長に待つとしましようかねー。

SIDE 近衛 木乃香

さいせんお祖父ちゃんから電話が在つてお密はんを迎えてくれへんかと頼まれた。

明日菜は珍しく部活だし、あたしも暇やつたからすぐOKした。で、今はそのお密はんが待つてるつていう近くの駅まで迎えに行つとる最中なんや

お祖父ちゃんが言つにはお密はんはまだ10歳の子供つて話やつた。あんまり長い時間待たせるのはまずいと思つてあたしはちびつと急いでいったなんや。

で、今駅に着いたんやけど・・・お密さんの名前つてなんやろなー?名前も知らんしー?てか男かいな女かいなー?今お祖父ちゃんに電話したら、留守電らしくて繋がらへんかつたわ。しゃーない。見た目10歳前後のそれっぽい人に手当たり次第声掛けみてるかー。

SIDE ルクス

待ち始めてから30分ほど経つたひじょうつか、突然見知らぬ女性の方に声を掛けられました。

「なあなあ、君がお祖父ちゃんのお密さんかえ～？」

・・・・・　お祖父ちゃんってだれですか。

僕が呆然として彼女の顔を見上げると

「あ、お祖父ちゃんってのは学園長なあ。で、頼まれて迎えにきたんやけど君がお密さんでいいんかなあ？」

そう朗らかな笑顔を浮かべながらそう説明してくれた。

「つうはの名前は近衛木乃香や。で、君の名前は何て言つん？」

近衛・・・？確かにこの学園長も近衛姓だったな・・・。ああ、じやあこの人は学園長の孫つて事か。

僕はベンチから立ち上がり、姿勢を正して

「はじめまして、ルクス・アヴェスターです。どうぞ気軽にルクスとお呼び下さい、近衛さん」

そう言つと彼女は少しだけ怪訝な顔をした、するとここで一度彼女の携帯が鳴った。

「はいはい、あ、お祖父ちゃんか。うん、今会えたで、あ、うんうん、じゃあ直ぐ行くわ～」

そこで通話を止め、僕の方へ向き直り

「今から学園長室に連れて来て～やつて、ほな、行こか～」

と言つて僕の手を掴んで歩き始めた。

何でいうか、独特な雰囲気の人です。・・・でも、悪い感じじゃないです。

SIDE 近衛 木乃香

お客さんと会つてお互いの自己紹介をした時に、何か変な感じがしたんや。で、ちょっと聞いてみようとした時に携帯がなつてもうた。で、お祖父ちゃんが今から部屋に来てつて言つとるからどりあえずこの子の手掴んで歩き出したんよ。

その時に、何となくわつを疑問に思つた事を聞いてみたんや。

「なあなあ、ルクスはお嬢ちやんでええんよな？」

そういうと、その場ですつこなられてもうた。

しもた、男の子やつたんか。いややわあ何でいうか中性的な感じやつたから良くわからへんかつたわ。

それでもナイスリアクションやつたわ。ええツツココになれるわ

「ルクスはお嬢ちゃんでええんよな？」

思わずすつこけましたよ、ええ。

お嬢ちゃん？僕の何処を見て女の子だと！？髪か？この中途半端なショートカットの所為か！？

と思いながら道端で○△状態になりました。それを見ていた近衛さんは

「『めんなあ、ほらつ結構かわえかつたからついなあ？飴ちゃんあげるから許してえ？』

と挫折する僕の横にしゃがみ込んで謝つてきた。飴を差し出しながら。

僕は幼児か！？こんなお菓子で誤魔化されるか！？でもくれるなら貰つておくことにする。

僕は立ち上がり、飴を受け取り口に入れると、うん、美味しい。

そんなやつとりをして、僕らは学園長室に着いた。

第四話（後書き）

多分次の更新日は明日中です。

感想レビュー等があればもっと頑張れる気がします

第五話

第五話

学園長室にて

SHIDE 学園長

さて、そろそろルクス君が来る頃かのう。 そつそう、 もつも向こうの校長から届いたばかりの書類があつたんじやつた。 来るまで見ておこうかのう。

えーと何々、 ふむふむ、 やはり魔法使用に難があると・・・。 ジヤが体術や知識は大したものみたいじやのあ、 ん? 要注意事項じやと? むう・・・

書類を読みふけつておると、 突然扉がノックされ木乃香が覗き込んで来た。 わしは書類を机の中に仕舞い、 木乃香とルクス君を招きい

れた。

木乃香はともかく、ルクス君はやや頭を垂れたまま部屋に入つてくる。緊張しとるのじやろうか、部屋のあちこちをキヨロキヨロと見回しとる。

そこでわしが彼の名を呼ぶと彼は顔を上げた。

そして彼とわしの目が合つた、その時

ゾクッ

ルクス君は琥珀色の目でわしを見てきた。書類と同封の[写真では翡翠色の目だつたはず]じゃが・・・

その冷たく射抜くような、いや、見抜くような視線にわしは思わず冷や汗をかいだ。じやがその後瞬きをすると直ぐに笑顔でわしに挨拶をし始めた。

その目は[写真と同じ翡翠色]をしていた。

うむ、きっと何かの見間違いじゃろう。

近衛さんが学園長室の扉をノックし、顔を覗き込む。その後直ぐに部屋に招きこまれた。そこには学園長である『近衛 右衛門』が机の向こう側で座っていた。

名前と身分等の情報はあつたけど、実物は始めてみた。

それにしても本当にこの人、人間か？特に後頭部が。日本で言つところの「妖怪ぬらりひょん」かと思つたよ・・・。それはさておき・
・

部屋に入った時、外からはわからなかつたけど何らかの魔法が感じられた。恐らくは対魔法妨害用の結界だと思つ。いつも張つてあるのか今日だけ張つて

あるのか、まあ殆ど魔法が使えない僕には関係ないけど。一応魔眼を発動して術式解析だけしておく。ある程度室内を見回すと、校長が名前を呼んでくる。

僕はそのまま、魔眼発動状態のまま学園長と視線を合わせる。されば高位の魔法使いだけはあるみたいで。何らかの反応を示しました。僕は瞬きをして

魔眼を解除してから、学園長と挨拶を交わしました。

「はじめまして、ルクス・アヴォスターです。今回は僕の勝手な事情を考慮してくださいましてありがとうございます。」

ルクス君はとてつて礼を述べた。うむ、礼儀正しくてなによつじや。そして荷物と一緒に持つていた紙袋を手渡して来る。

「これ、つまらない物ですが皆たとえどうか。」と「いやいや、修行で来たんじやしそんな氣を使わんでも・・・」
と言つてわしは袋の中を見た。そこには・・・

『赤福』『草加煎餅』と書かれた箱が入つておつた・・・。

・・・・・・・・何でじや？

わしはとりあえずそれらを紙袋にしまい、ルクス君との会話を続けることにした。

「なんでも修行のために日本で学校の先生をとか・・・そりゃあ大変な課題を貰つたのつ」

わしは笑いながらそりあつた。

「はー、よりしへお願いします。」

彼は笑顔でそり返してくる。うむ、何とかなりそりあじやのつ。

「しかし、まずは教育実習とゆうことになるの、とりあえず一週間後から二〇までじゃ。実習が始まるまでこちら側の生活になれておくといい」

つと、わしはそれを言つてからあることを思い出した。つーむ、まだ一人来てないが言つておこうかのう・・・。

つと思つとしたら部屋の扉がノックされた。わしはすぐに入つてくるよつに促した。

SIDE 神楽坂 明日菜

突然、部活中に学園長から電話が来た。何だろ珍しいと思いながら電話に出てみると、部活が終わり次第学園長室に来てくれだつてさ。で、部活が終わつて

からちよつと急ぎ氣味で学園長室に走つたのよ。で、扉をノックしたら直ぐに返事が返つてきたから部屋に入つたら、木乃香と見知らぬガキンチョが居たのよ。

「げつ」ってあからさまに嫌な声と表情が出たけど顔を左右に振つて誤魔化して学園長に田を向けたのよ。でもその時に何か視線を感じたからガキンチョの方をチラツと見たら、そいつは私の方を見てて、ニコツと微笑んできたのよ。・・・ツ！？何か一瞬ドキッとしたじやない・・・。

突然の来訪者が入つてきました。彼女は近衛さんと同じ制服を着ていました。おそらく近衛さんの同級生でしょうか。僕がそう思つていると彼女は僕の姿を見たとたん、

「げっ」とあからさまに嫌そうな声と嫌そうな顔をしました。

・・・・・初対面の人間に向かつてそれはないでしょ・・・僕の心がガラスの様に纖細だつたらどうするんですか。

で、その後彼女は近衛さんの横に立つて誤魔化すかのようになに顔を左右に振つてました。そこで何故か妙な魔力を感じたので、再び魔眼を使用しようつとしました。ですが僕が視線を向けて居るのに気づいたようです。意外と感が良いですね。とりあえず笑顔で会釈しておきました。

SHIDE 学園長

さてアスナちゃんも来た事じゃしそろそろ言つておこうつかのつ。

「つむ、アスナちゃんと」の間に頼みがあるんじゃ、突然で悪いんじゃがルクス君をしばらく一人の部屋に泊めてやつてくれんかの？まだ住む所決まつとらんのよ

「げ」

「なつ？」

SIDE ルクス

「ルクス君をしばらく一人の部屋にとめてやつてくれんかの？まだ住む所決まつとらんのよ」

「げ」

「なつ？」

一体何を考えているんでしょうかこの妖怪は？やはり人間同士の常識と言うものは理解できないのでしょうか。ほぼ初対面の男女が行き成り同棲などで

出来るわけ無いじゃないですか。普通の女性ならそんな事は嫌がるはずです。そう思いながら僕は困惑した目で近衛さんと神楽坂さんたちの方を見ました。

・・・あれ？近衛さんはOK的な顔になつてますよ。でも神楽坂さんは嫌そうです。というかさっきの「げ」は聞こえていますからね。そんなに嫌ですか、そうですか・・・。

僕の防弾ガラスのように纖細なハートに輝が入りましたよ・・・。

地味に落ち込んでる僕を見た神楽坂さんが「大体あたしはガキが嫌

いなんですよ!」つて更に追い討ちを・・・ああ、輝が亀裂に・・・。

落込んでいる場合じゃないですね。僕もさすがにこれは黙つておけませんので。

「大丈夫ですよ、学園長、それに近衛さんと神楽坂さんも。こっちへ来る前に駅周辺で住宅情報を検索済みです。もよりの不動産屋にも電話で聞きましたし

あれだつたら一週間あれば入居可能ですよ。」

それを聞いて学園長が、え?つて顔をする。一応こんなこともあるうかと調べておいて正解でした。

「とりあえず、部屋が正式に決まるまではウイークリーマンションかビジネスホテルで寝泊りしますので、二人に迷惑はかけませんよ。」

「

と、言つと近衛さんにもう反発されました。

「駄目やつて!子供一人じゃ大変やろ?」飯とか洗濯とかどうするん!?」

「アスナも!ルクス一人じゃ可哀そうやん!..暫く我慢してえな!」

「

さつきとは違う強硬な姿勢を見せる彼女に僕も神楽坂さんも反論できず、僕はとりあえず下宿が決まるまでお一人の部屋に居候するこ

とが強引に決められました。

神楽坂さんもかなり不服そうでしたが、一応納得していました。それを学園長は微笑ましそうに見ていました。この妖怪め・・・

取りあえず一人の部屋に居候する事が決まつたし、神楽坂さんにはまだ挨拶もしていませんので改めて挨拶をすることにしましょうか

僕は一人の方へ向き直り姿勢を正し、

「ルクス・アヴェスターです。近衛さん、神楽坂さん、よろしくお願いします。」

と深々とお辞儀する。すると

「『神楽坂さん』じゃなくて名前で呼べばいいわよ、歳も近いんだし。木乃香もそれの方がいいでしょ？」と神楽坂さん、いや明日菜さんが言つ。

「つちらも名前で呼ぶから丁度ええなー。」つと微笑んでる近衛さん、いや木乃香さん。

改めて一人の名前を呼んでお礼を言つた。その後僕らは学園長室を後にしてそのまま一人の寮に行つた。

・・・・・ 嵌められた・・・ 女子寮つて・・・ しかも女子校つて・
・・ そんなの聞いてない・・・

この晩、僕は学園長ねらうひよんに怨嗟の念を送った。

麻帆良学園学生寮

SIDE ルクス

こじが女子寮と分かつたのでここには早急に下宿先を見つける次第です。で、いきなりですが問題が発生しました。

一つ目、居候になるのですから自分は家事等を担いたいと申し出たのですが、速攻で木乃香さんに却下されました。

幼少のときから一人暮らしをしているので、家事には自身があるのに・・・それに手伝い位は居候としての義務かと・・・

木乃香さんが言つには、子供は遠慮してはいけないとか何とか。それは余計なお世話です。ですが攻防の末、夕食後の片付けと部屋の掃除をすることは何とか許されました。ああ、安心した。

何もしなくていい何て拷問ですよね。

もう一つ問題がありまして、それについてはまだ議論中です。

それは、寝るところの問題です。僕は今夜はとりあえず毛布でも被つて床で寝ると言ったのですが、木乃香さんが許してくれません。自分と一緒に寝たらどうかと提案されました。いやいや、それはちよつとうかと。確かに日本には『男女七歳にして同衾せず』と言う言葉があるとかないとか。子供だから遠慮してはいけないとかそんなことを言つてくる場合じゃないと思うのですが・・・。

「ところ訳で、僕はやはり床で寝ます。寝具は明日買いますから一日くらいなら問題ありませんよ。」

「でもまだ寒いやろ？風邪引いたりひどいするんよ、だから今日一日くらいは我慢して一緒に、な？」

「ですが、日本には『男女七歳にして同衾せず』と書かれた言葉もあると聞いています。だからその・・・」

「難しい事知つてんなー。」

「いい加減にしなさい！ガキンチヨは大人しく言つ事聞いてりやいのよ！・・・」と僕の襟を掴んで木乃香さんのベッドに投げ込みました。

「ぶつ！？」布団にダイブする僕。そして即座にベッドに入り僕の

退路を塞ぐ木乃香さん。・・・」の「一人コンビネーション抜群すぎません？」

このままでは強制的に話を持つて行かれそうだったのですぐさま起き上がり二人の反論しようつとしました。ですがすぐ木乃香さんの言葉に遮られました。

SIDE 木乃香

まだ冬真っ只中やし一緒に寝よつて言つてんのにルクスは一人で床で寝るつて言つんや。まだ子供やからええやんつて言つても難しい理屈で反論しよう

とするんや。やからうちはアスナにちょいと目配りしたんや。

視線だけで、（まかせた）つてアスナを見た。するとアスナがちょっと悪人顔で頷いて

（了解^{ラーナ}）つて視線で返してきた、気がした。

すると直ぐにアスナは「ええ加減にしー！」的に怒鳴つて、ルクスの襟首掴んでうちのベッドに放り込んだんや。いや、そこまでせーへんでも・・・

で、それを見てうちは速攻でマッハでベッドに潜り込んでルクスの退路を塞いだ訳よ。でもルクスがまだギャンギャン言いそうやつた

んで

「ルクスはうちの事嫌いなんか？」

そしたらルクスは直ぐに下向いて

「いや、あの、そ、そんな事は、無いです・・・」

・・・・・勝った！

SIDE 明日菜

まったく、ルクスは。初対面の態度はちょっと大人っぽかっただから大丈夫だと思つたけどやっぱガキねー。ん？木乃香がこっち見て・・・
何か目配せを・・・ハハーン、『やれ』ってことね。ということであたしは軽く頷いてルクスの襟首を引っつかんで木乃香のベッドに放り込んでやつたのよ。あーーースツキリしたーー。第一最初の居候の義務がどうこう言つてる時からちよつとイラッとしてたのよねー。ガキが遠慮何てすんなつてんのよ。むーで、

「じゃ、電気消すわよー。」

まだルクスが何か言いたそうにしてたけどすぐさま木乃香に口塞が

れたわ、はい、おやすみなわーい。

SIDE ルクス

「「つかの事嫌いなんか？」

「いや、あの、そ、そんな事は、無いです・・・」

いや、あつたばっかりの人をいきなり嫌いになるとか、そんな性格してませんよ。だから僕が言いたいのはこの歳でほぼ初対面の男女が一緒に寝るのはどうかと言う事で、

ちよつ！まだ話は済んで無いのになに明日菜さん部屋の電気消そうとしてるんですけどツツツツ！？」木乃香さん、口を塞ぐのは反則ですよ！？

明かりが消された。

・・・負けた・・・

僕はその日、諦めて木乃香さんと一緒に寝ることになつた。結構疲れていたせいか、部屋が暗くなると直ぐに眠気を感じてきた。

でもせめて最後の悪あがきとして体をベッドの端に寄せておへりにして、意識を手放す事にした。

他者と眠るのは何年振りだろう・・・僕は、久方の体験に懐かしさを感じつつその日は眠りについた。

早朝、木乃香さんに抱きつかれていた。そしていつの間にか僕の腕を枕にされていた。・・・うう、腕の感覚が無い・・・。どけてえ・・

第六話（後書き）

何か段々と主人公がヘタレになつてきたような気がします・・・

第七話（前書き）

居候中のことを書いたかと思つたのですがもの凄く長くなつたの
気がするので、

また余談として書いたと思つます・・・

SIDE ルクス

明日菜さんと木乃香さんの部屋に居候し始めて一週間、ついに日本での下宿先が整いました。
いやあ一応向イギリスこうで色々と魔法雑貨扱つてお金貯めて良かつたです。

ちょっと古いけど良い洋館が買えました。

建てられたのは結構昔みたいですが不動産屋がちょくちょく清掃に入っているみたいですし、リフォームもしたらしく内装はかなり綺麗でした。勿論、電気ガス水道付きであとネット接続エリア圏内です。

学校からちよつと遠いのが難ですけど、周りに他の民家が無くてとても静かです。しかも裏が森だし薄暗いせいか殆ど人が来ないみたいです。いやいや魔術の隠匿にはもつてこいの物件です。地下室も付いてましたし。

ただ、見た目とまわりの森の印象のおかげで、学園の生徒からは幽靈屋敷と呼ばれているそうです。

そう、契約して鍵を渡された次の日に教えられました・・・・・

まあ、出でたら出でたで対処するから良いんですけどね。

で、取りあえず洗濯機や冷蔵庫等の必要最低限の家具が必要になつたので一週間のうちはもつ、ドタバタしていました。

今は大分落ち着いてやつきましたで、女子寮のほうで明日菜さんと木乃香さんの部屋で夕飯を『馳走になつてました。

夕食を食べ終えて後片付けをし、その後他愛も無い話をしながら時間を使つしていました。

それから帰る時になつて、明日菜さんと木乃香さんに一週間の間の

お礼をいいました。

最初はちょっと意地悪そつだつた明日菜さんとも大分馴れ合つ事が出来て良かつたです。またおいでと言つてくれました。

木乃香さんには、『辛くなつたら何時でも帰つて来てええんよっ。』とまで。・・・貴女は僕のお母さんですか。

と、笑つて別れて今は家で色々とやつてゐるわけです。

取りあえず家の地下は魔術工房に仕立てる予定なのでイギリスから持つてきた荷物を広げときましょうか。
後、人形遣い用の傀儡も転移しどきましょうか。

まあ色々やつてる間に夜は更けて行きました。

で、今さつきなのですが、妙な気配を感じました。うまくは言えないのでなんと云つうか、人ならざるモノの気配みたいなものを・・

家の裏の森の奥深くから・・・

ちよつと、見てみると少しもしゃうが・・・

第七話（後書き）

次回、次々回位からは戦闘回予定です

麻帆良学園郊外の森

夕暮れの学園郊外の森、普通の人間なら絶対に近寄らないであろう場所・・・そう、普通の『人間』ならば・・・

森の奥まつた場所で十数人の人影が見える、いや、人の形はしていない。

言つなればアレは『鬼』と言つたほうがいいのだろうか。

身の丈2m以上あるモノやクモの様な姿をしたモノ、狐やカラスに似たモノ達もいるだろうか・・・。

それらはこの森の中で皆一様に同じものを見ているようだ。それらの視線を追う。視線の先はやや上方、木の上の方に向いていた。

暗くて良く見えない。だが、目を凝らして見てみるとそこには、一人の少女が両手を縛られて吊るされていた。

彼女の状態は芳しくは無いが一応生きている。だが体のあちこちに打撲痕や切り傷擦り傷、服の下からは薄らと血が滲んでいるのが見える。肋骨を骨折しているのだろうか、小さな呼吸を繰り返す度に口元を苦痛に歪めている様に見えた。

何故こんな状況になっているのかは知らないが、おそらくはこの少女と鬼達は敵対関係にあるのだろう。鬼達は彼女が苦痛に悶えるのを見て、愉快そうに笑っている。彼女が鬼達を睨みつけるとその中で一番体の大きな鬼が、その手に握っているまるで柱の様な鉄の棍棒で彼女の胸を軽く小突いた。彼女はその微かな衝撃で、小さなうめき声と苦悶の表情を浮かべる。そしてそれを鬼達はまたもや愉快に笑っていた。

日没前、私は学園内で妙な氣の流れを察知した。大方、どこぞの魔法使いが学園にちょっかいでも出しに来たのだろうと、そう思つて特に上には何も言わずに侵入者だけ片付けて何事も無かつた様に戻ればいいと思っていた。正直、軽く見ていた。

それが甘かつた。

森の奥に行つてみると、十数体の式神だけがそこに居た。良くいる下級の式神だ。数こそは多いが私一人でも十分倒せる相手だ。

「神鳴流奥義、百烈桜花斬つ！－！」

十数体の式神を数分で切り伏せた、式神は全て札に戻つた。なんと他愛も無い。私は刀を納めて辺りを見回した。周りに術師の姿はないし

どこかに身を潜んでいる氣配も無かつた。すると突然

パツ

元式神だつた札が光を放ちその下に召喚陣が現れ、十数体の鬼達が姿を表した。

その時私は完全に油断をしていた。鬼達を召喚を確認してから私は刀を構える。だが、その前に鞘ごと奴等の剣ではじき落とされた。その後は、特に説明しなくても分かるだらう・・・。

私は奴等に叩きのめされ、木に吊るされた。体中のあちこちが痛む。腕や足の打撲裂傷はまだ軽い方だが、肋骨が3、4本折れているみ

たいだ。

呼吸の度に、痛みが沸く。

木の上から下に居る奴等に目を向ける、私の無様な姿がおかしいのだろうか、愉快そうに笑い声を上げている。一いつら・・・。

私が目を細めて睨みつけているのに気づいたのか、奴等の中でも一番巨体の鬼が手に持った鉄棍で私の胸を小突く。
私はあまりの痛みに、微かに苦悶の悲鳴をあげ顔を歪ました。それを見た奴等はさらに愉悦に浸っていた。

それから半刻程たつた頃だろうか、奴等の一人、鳥族の奴が口を開いた。

「さて、護衛の神鳴流剣士は手に入れた。次は近衛の者だったな。」

近衛の者、だと？

まさか！？

「近衛木乃香、その少女を手に入れる。それが今回の召喚理由、だつたな？」

ツツツツ！――！

「貴様等あツツ！――！お嬢様に手を出す事は断じて許さ、がああつ

！…？

私は怒りのあまり怒鳴り散らす、だが途中で腹を鉄棍で強く突かれ、そこで言葉を止めた。

痛みのあまり、声が出なくなつた私に奴等は

「ギャンギャン喚くな、神鳴流。」

「嬢ちゃんには大切な嬢様を手に入れるための餌になつてもうりからなあ、それまで体力残しとけや。」

奴等はそう言つて盛大に笑い出す。

私を餌にお嬢様を・・・？

やらせない・・・

私のせいでお嬢様、このちやんが不幸になると云ひなひ・・・

この血液の命を・・・

そう思い

私は顎を動かし、舌を噛み切る

はぎだつた

そう、奴等の後ろにゐる配を感じじるまでは

第八話（後書き）

次が、戦闘回です。がんばって書きますよwww
感想、レビューあつたらお願ひします

第九話（前書き）

小分けにして書いたので色々文章的におかしいところがあるかもです。

第九話

第九話

SIDE 刹那

私はありえないものを見た。こんな森の奥深くで異形が蔓延るこの場に、ありえないものを。

私を嘲笑う鬼達の後ろに立つ、少年を。

森の暗さで顔は分からなかつた、いやそれよりも目を引かれるものがあつた。

磨きぬかれた刃の様な銀髪

闇夜に光る月のよつに輝く琥珀色の瞳

そして濃紺の衣と黒く輝く甲冑

その出で立ちに私は目を奪われた。今の自分がどうでも良くなるくらいに。

私の目が自分達の後ろを見ている事にその内の一體が気づいたようで、ふいに首を後ろに向けた。

瞬間

鬼の首が飛んだ。

初見では何も持つて居なかつた少年の手に斧槍が見える。

仲間がやられた事に気付いた鬼達が順次後ろを振り返る。その度に鋭い一撃が鬼達を襲つた。

少年は自分の身長よりも遙かに長大な斧槍を軽々と扱う。その動きはまるで暴風の様だつた。

その荒々しい刃の舞が数体の鬼を薙ぎ払う、そして少年は斧槍の柄

の中程を持ち大きく振りかぶつて鬼達へと投げつける、その一投でまた一体の鬼が貫かれ果てた。

その時、一体の素早い鳥族が少年の後ろに回りこんでいた。奴は刀を振り上げ、少年の首を断たんとしていた。

無論、私は少年へ喚起を呼びかけた。だがそれは杞憂に終つた、なぜならば

その鳥族を刀を押える新たな存在が現れたからだつた。

その存在は、形容するならば、中世の騎士の様な格好をしていた。

全身を重厚な鎧で包んだ、人間・・・だろうか?ここからでは良く分からぬ、それ以前に本当に人間なのだろうか。

その騎士は、少年を襲つた鳥族の刀を右手で掴み、残つた左手で鳥族の頭を掴んでいる。その異常な光景に鬼達は身動き一つせず

その光景を見ていた。

ふいに少年は首を少し後ろに向け、そのまま軽く頷いた。すると騎士は握んでいた刀を圧し折り

鳥族の頭を握り潰した。

不快なバキバキと言つた音が響き、止む。

それを合図に鬼達は一斉に少年と騎士を囲んだ。囲まれた少年と騎士はお互いの背中を合わせ、周りを牽制する。だが・・・

少年は勿論騎士の手には武器が無い。先ほど放つた斧槍も遠いし、それに鬼達の後ろにある。まだ十体近い鬼を無手で相手するには分が悪い。

私を突いた巨躯の鬼が鉄棍を振り上げた。そして少年に向かって振

り下ろす。少年は微動だにせずいる、いや

笑っている・・・？

SIDE ルクス

森の奥へ行くに連れて異常な気配が濃くなつてくる。あと緊迫した
気も感じる。

戦闘を行つてゐる可能性があるだらうか、僕は移動しながら魔術礼
装を身に着けておく。それと人形を一体転移させておいた。

森の少し開けたところに出た。誰かが集団になつていて。僕は気配を消し、エアストを後方へ待機させてそれらを観察した。

それはどこかの術師が召喚したと思われるモノたちだつた。日本の鬼の様なモノ達、皆一様にして上を見上げている。

それに習い僕も奴等の見ている方を伺つた。

そこには、両手を縛られて木に吊るされている全身を負傷した少女が吊るされていた。

推測だがに、彼女は学園関係者だらう。そしてあの鬼達は学園に仇なす者が召喚した使い魔だらう。

ぱつと見たところ彼女の傷は多少放つて置いた所で死にはしないだろう。奴等も多少彼女に手を出して弄んではいるが、態々この学園内で殺人などは犯すまい。

それにこれだけの気配だ、もう少しすれば学園の魔法使いが助けにくるだらう。

そう思い、僕は彼等から興味が失せた。エアストを撤収して帰らうかと思った、その時

「さて、護衛の神鳴流剣士は手に入れた。次は近衛の者だつたな。」

何・・・?どういう意味だ。
僕は耳を傾ける。

「近衛木乃香、その少女を手に入れる。それが今回の召喚理由、だつたな？」

へえ・・・

彼女に手を出すつもりか、だったら・・・

僕は歯を噛み締めて、体に魔力を流した。臨戦態勢に移る。

僕は奴等の背後に近づいた、誰一人として僕の気配に気づかない。

「ゲット セット
投影、開始」

僕は半月斧バルティッシュを投影する。すると僕の直ぐ前に立っている鬼がこちらに反応を示して振り返ってきた。

声に気づいたか、気配に気づいたか、だがもう遅い。鬼の首がこちらを向き僕を視認する、その前に、

鬼の首を切り飛す。

その音で漸く気づいたのか、奴等は次々と後ろを振り向く。僕はその振り向いてきた奴等を順番に切り伏せていった。

こいつ等彼女に気を取られていたのか、それとも格が低いのか知らないけど・・・正直弱い。

次々と倒れていくがその内の一体が全体に号令を飛ばして展開させていた。とりあえず、持っていた半月斧を展開が遅い所に投擲した。ちつ、一体しか刺さらなかつたか。

ん？後ろに回りこんだ奴がいるな、中々素早いじゃないか。
うんうん、良い殺氣を飛ばしているみたいだね。

でも駄目だよ、それじゃあ後ろに居ますよって宣伝している様なものじゃないの？

ほら、『アレ』が来ちゃつたじゃないですか。

奴の背後からエアストが襲い奴の得物と頭を掴み、僕の方へ視線を向けた。

僕は「やれ」と頷いた。

エアストは命令通り、そいつを“やつた”

その光景を見ていた鬼達は、再びリーダー格と思われる一体の号令

の元で僕とエアストを囮む。僕もエアストと背中を合わせ周りを牽制する。

そうしているとリーダー格の鬼が僕の前に立ち、鉄棍を振り上げる。後ろは後ろでエアストに向かって数体の鬼が一斉に飛び掛っていた。

甘いなあ・・・、思わず口元が吊上がってしまつ。

僕は再び武器を投影する。

『エッケザックス
呑毀なる巨劍』

エアストの手元に・・・

そして僕は予め持っていた御守タリスマンを手の平に縛りつけた。

鬼の鉄棍が下ろされる。それと同時に僕とエアストが動く。

エアストは僕の頭上レスレに剣を振るい、僕はエアストの後ろの鬼共タリスマンへ御守の魔力を解き放つた。

鉄棍が少年に当たるその時少年の背後の騎士が突如振り返った。その手には何時の間にか一振りの大剣が握られていた。

大剣は少年の頭擦れ擦れの位置を横薙ぎに振られ、少年を襲う鉄棍の主である鬼の胴体を横薙ぎに断つ。

そして少年も振り返り騎士の後ろから襲つてくるモノ達に向かって手のひらを向ける、瞬間、白い光が迸り飛び掛つくる鬼達を消滅させた。

それで戦いは終つた。

・・・凄い。

そうとしか思えなかつた。

私はただただ少年と騎士を見つめ続けていた。

すると、少年が私の方を見上げていた。ハツとした次の瞬間

騎士が私の方へ、初めに少年が携えていた斧槍を投擲した。

思わず目を瞑った。だが斧槍は私をそれで私の両手を縛る綱を断ち切った。

その瞬間、私の体は地面に落下を始めていた。やばい、この体制では受身は難しい。それに傷のせいで体が思うように動かない。駄目だつ！

私は目を瞑り地面に打ちつけられる痛みを覚悟した。だが痛みは来ず、代わりに誰かに受け止められる感触が走った。

恐る恐る目を開けた、するとそこにはさつきまで鬼を屠っていた少年の顔があった。

第九話（後書き）

戦闘描写って難しいですねえ。orz

次回もこれの続きが少しあります。その後にでも出てきたアイテムや人形の補足を掲載します。

SIDE ルクス

僕は彼女を受け止めそれと同時に体の傷を解析した。全身打撲、裂傷、刀傷、それに肋骨の骨折・・・酷いなあ。

ふと、彼女は目を開けて僕の顔を見つめていた。・・・とりあえず彼女を降ろそう。

僕は彼女を近くの木の根元に座らせた。そして治療用の宝石を用意する、そうしていると彼女が立ち上がろうとしていた。

「待つて、動いちゃ駄目だよ。」

僕は出来る限り優しく言った、彼女もそれで緊張を解いてくれた様ですぐに大人しく座りなおしてくれた。

僕は彼女の胸の辺りに石を持った手を近づける。
彼女はその石をまじまじと見つめていた。

治療を開始する。宝石は青く光り輝く。

彼女はその光を見て一瞬顔を強張らせるが、治癒が効いて来たのか段々と楽そうになつていった。

そして数分後には体の内外の傷は完全に治癒し終わったようだつた。

僕はそれを解析で確認してから治癒を止め、宝石を仕舞う。

と、そこで他の誰かが近づいてくる気配がした。二人程の気配、学園からの応援だらうか。

一応僕は魔法は殆ど使えない事になつてゐるからここにこれ以上居るのはまずいだらう。

僕は立ち上がり即座にエアストを転移させてから彼女に背を向けた。

「あ、あの！」

彼女は僕の背中に声を掛ける。僕は彼女の方を振り向いた。

「えつと、助けてくれてありがとうございます。貴方は、一体・・・？」

僕は目を瞑つて考えた。素直に名前言つちゃまずいしそれ以前に彼女が応援者に僕の特徴を言つのもまずいだらうし・・・。

そう一秒程考えてから彼女に微笑んで、

口に人差し指を当てた。

『誰にも言わないで』

そのジエスチャーで彼女は分かってくれたのか頷いて、微笑みながら同じジエスチャーを返してくれた。

それに微笑み返してからそのまま僕は彼女の前で転移をし、その場から離れた。

SIDE 刹那

私は彼の顔を見つめる。彼は琥珀色の目で私を見つめている、だがふと何かを思いついたかのように私を木の根元に下ろして座らせる。すると彼は何かを取り出そうとしていた。何をするのだろうか、つい、立ち上がりうとする。だが

「待つて、動いちゃ駄目だよ。」

と、優しくそれでいて凛とした声で言われた。私はその声に答えるように、木を背にその場に座りなおした。

すると彼は私の胸の前に手を出す。そこには小さな薄らりと青い石が握られていた。

私はそれをまじまじと見つめる、すると彼の手にある石が青く輝き始めました。

私はそれを見て一瞬警戒する。だがそれも杞憂だったようで直ぐに

体中の痛みが和らぎ始める。

治癒魔法なのだろうか？だがこのようなものは始めてみます。それに何だか優しい感じがする・・・。

私はその光に身を預けた。そして数分後治療が終つたのでしょうか、彼は治癒魔法を止めて石を仕舞いました。すると、彼は何かを感じ取つたかのように後ろに控えていた騎士を消し、私に背を向けた。

行つてしまつのでしょうか？私はすぐさま彼の背に声を掛けた。

「あ、あのー」

彼はゆっくりと後ろを振り返る。色々聞きたいことがありますが、まずは・・・。

「えつと、助けてくれてありがとうございます。貴方は、一体・・・？」

私は礼をし彼の素性について尋ねた。すると彼は一瞬目を瞑り、口元に笑みを浮かべて

口に人差し指を当てました。

『内密に』と『口』となのでじょうか・・・はい、わかりました。

私は頷き、同じジョスチャーを返しました。すると彼は再び微笑み

返してから、夜の闇へと消えていきました。

それから直ぐに応援の刀子さんとガンドルフィーー先生が着て下さいました。そして二人に今回の報告をしました。

勿論、彼の事は一切話していません。ですが二人はしきりに他に誰か居なかつたかと聞いてきました。ですが私は絶対に彼との約束を破りませんでした。

SIDE ルクス

荒事は久しぶりですね。まあ、良いストレス解消になりましたし、それに人形の調子も計れましたから良いとしましょうか。

さて、明日は早いですからそろそろ寝ましょつか。では、おやすみなさい。

第十話（後書き）

次からは学園パートです。

皆様の感想、レビューが執筆への活力となります。w

設定補足0-1

設定補足0-1

魔術礼装「玄鎧礼装」

ルクスが戦闘用に作成した魔術礼装。通常展開時にはブレストプレートと脚甲手甲のみ、完全展開時には頭部も隙間無く覆う事になる。能力は、常時展開型の対魔対物障壁、筋力動体視力強化、異常状態緩和等。

見た目は結構重厚に見えるが、普通の衣服並みに軽く出来ている。

人形

ルクスが人形遣いとしての技術を駆使して作った人形。見た目は全高約2m程の騎士甲冑。ちなみに見た目はルクスの趣味である。殆ど人間と同じ程度の稼動箇所及び稼動範囲を有している。人形内に張り巡らした擬似魔術回路によつて人形を通しての魔術行使が可能となつていて、使用できる魔術は強化魔術程度である。因みに見た目は殆ど変わらないが、特殊仕様の人形も存在する。

『エアスト』

ルクスが人形を自動人形として使用する際の人工精神体。降靈魔術の応用で作った人工知能。宝石等で作った『精神の器』と呼ばれる石に精神記憶等を保存している。基本行動はルクスの身辺警護を主

オートマタ

目的として行動する。だが大抵は常時人形姿で家の地下工房内で待機している。

一応、コミニケーションが取る意思や知識はあるが人形そのものに発声機関が存在しないためルクス以外とのコミニケーションは難しい。（ルクス本人も細かいコミニケーションは取れない。）本人（？）としては主人を大切に思っている。

因みに性別は今のところ本人も製作^{ルクス}者も分かつていな（肉体である人形に性別が無いための可能性が高い。）

名前の由来は独語の“erst”意味は“第1”

バルディッシュ

長柄武器『ポールウェポン』の一一種の長い刃を持つ斧である。半月斧、クレセントアックスと呼ばれる事がある。日本的には薙刀に近いものである。

通常150cmから200cm程度の柄の先端に三日月状の斧刃が付いたものである。因みにこの作品では某魔法少女のアレとは関係無い。

（一応実在する武器です。）

『呑殿なる巨劍』（エッケザックス）

エッケザックスは小人に頑丈に鍛えられ数々の戦を無傷のまま戦い抜いた巨人エッケが使用していた名剣。

全長2m程あるグレートソードである。

設定補足〇一（後書き）

『ヒースト』をこれから譲れるようじよりと考えております。

出できた武具魔術等は独自の解釈設定が織り交ぜられております。
ご了承ください。

また今度فاتةっぽくランクや宝具の分類をつける予定です。

感想レビューあつましたらどうぞ。

SIDE ルクス

早朝、僕はスーツに着替えて学園長室を尋ねました。そこで学園長としづな先生から教育実習のスケジュールや担当クラス担当教科の説明を受けました。聞いた感じでは少し大変みたいですが、何とかなるでしょう。

そして全ての説明が終り、教室へ向かうことになりました。教室へ行く途中でしづな先生から担当クラスの名簿を頂きました。因みに担当教科は英語です。

僕は直ぐに名簿を開いて見てみました。・・・・・何か留学生多くないですか？

てか写真見た感じでは中学生っぽくない人が居るんですけど、あ！木乃香さんと明日菜さんもこのクラスなんだ・・・あれ？この子は・・。

と、名簿眺めてる隙にクラスの前に着いたようす。何となく

窓から内部を見てみました。授業前であつて教室内は結構騒がしいです。

元気があるのは良いことですよね。

でも、…………やつぱり中学生っぽくない方々がいるなあ…………。

外から見ていても仕方が無いので意を決して中に入ることにしました。

しづな先生が扉をノックして中に入り、その後に続いて僕も中に入ります。

そして僕はしづな先生に促されて教卓の前に立ち、自己紹介をしました。

「はじめまして、今日からこの学校で英語を教える」となりました、ルクス・アヴォスターです。三学期までの短い間ですが、どうかよろしくお願いします。」

教室内は静寂に包まれています・・・、やつぱり子供が先生なんてのは無理がありますよね・・・。

「 か、かわいいいいいいいいいい ！」

余りの大声にちょっとビビッたのは内緒です。

「何歳なの〜〜！？」

「どこから来たの〜〜〜！何人！？」

「今、ビルに住んでるの～～～！？」

怒涛の質問攻めに圧倒されました。

あまりの勢いに何も言えずに居ると、

「はいはーい！ルクス先生への取材は私が仕切らせてもらひつよ～～～！」

と僕と生徒達の前に割つて入つた一人の少女、確か『朝倉 和美』さんだつたかな？

「えーと、朝倉 和美さんですよね？取材つて一体何ですか？」

僕がそういうと朝倉さんは意外そうな顔をした。

「あれ？ルクス先生つて何で私の名前知つてんの？」

「はい、さつき名簿で全員の顔と名前は確認済みです。」

と答えると、教室中から賛辞の声が上がつた。

とそこで朝倉さんが突如僕にペンをマイクのよつに向けて

「で、これから色々と質問に答えてもらいたいんだけど？」

「いやいや、これから授業でしょ？」と僕が苦笑いで答えると、

「いやあ、少しば質問に答えてもらわないと多分授業にならないよ？」朝倉さんは後ろを向く。

僕もそれに釣られて朝倉さんから目線をそちらに向けると、

妙にワクワクとした表情の生徒たちが待ち構えていた。
僕が唖然とした表情をすると、

「まあ、本のちょっとだけ個人情報晒してくれれば収まるからw

「いや、個人情報は晒させませんよーーー？」

「あ、ごめん。言い方間違えた。ちょっと質問に答えてくれるだけでいいからさあーw」

まあ、それくらいなら……。

僕は首を縦に振つて答えた。すると、朝倉さんは懐からHJレコードーらしきものを取り出して録音を開始した。

「じゃあまずは何歳からってどーりんで。」

「数えで10歳です。」

年齢を答えただけで教室中に歓声が沸いた。

「じゃあ何処出身? 何人?」

「イギリスのウェールズの山の中出身です。で、イギリス人です。」

さらに歓声が大きくなる。そして何処からか「ウェールズってどー?」って聞こえてくる。

「グレートブリテン島の南西ですよ。」と答えておいた。

「じゃあ今はどーこに住んでんの?」

「学園のはずれにある洋館です。確か学生の皆さんからは幽霊屋敷」と言わわれているそうですが。」

そう言うと更に歓声が大きくなつた。・・・もう何言つても同じ反応しかこないんぢやないのか？

「じゃあ次は個人的な質問を受け付けるよ。質問がある人は手をあげてね。」

「と朝倉さんが言い放つた。すると何人の生徒が手を上げる。そしてその後は生徒を朝倉さんが指をさして指名し、それに僕が答えるというスタンスになりました。

「まあ、こんなもんかなあ。先生、また取材させてねえ」W

それからしづな先生の手本の下で始めての授業をした。まあ、つかみは中の中と言つたところかな。

意外と皆さん真剣に授業を聞いてくれてましたし、精進あるのみです！

と、その後職員室で他の先生方に挨拶をして細かい業務説明を受けました。それでその日は終了となりました。

一段落着いて家に帰るうと帰路を進んでいるとき、木乃香さんから

電話がありました。内容は、少し用事があるから

今から教室に来て欲しいとのことでした。・・・何でしょつか？もしかしてまた取材とか・・・？

そのままヒターンして学校の方へ歩いていました。すると、少し離れたところで何かが落ちる音がしました。

辺りを見回すと、一人の女生徒が倒れているのが見えました。僕は直ぐに彼女に駆け寄りました。

第十一話（後書き）

戦闘時と主人公の性格が違いすぎる気がしてなりません。

感想お待ちしております。

第十一話（前書き）

今回はかなり短いです。

第十一話

第十一話

SIDE ルクス

僕は女生徒の顔を見る。！これは、うちのクラスの『綾瀬 夕映』さんじゃないか。

直ぐに彼女に声を掛けたが反応が無い。

周りを見回してみる、すぐ近くに手すりの無い高い階段がある。それに綾瀬さんの物と思われる本と飲みかけのジュースのパックが散乱していた。恐らく綾瀬さんはジュースを飲みつつ本でも読んでいてこの階段から転落したのだろう。僕は直ぐに彼女の体に解析を掛けた。

全身打撲、擦り傷・・・頭蓋骨骨折ッ！？心肺停止状態だつて！？

不味いな・・・コレじゃ下手に動かせないし助けを呼ばうにも人っ子一人見当たらない。くつ、考てる暇も無いか・・・。
僕は直ぐに懐から一番魔力の籠った宝石を取り出し、一応予備として腕まくりをして魔術刻印を露出させておいた。

「^{ゲットセツト}治癒、開始」宝石に青い光が灯る。「癒術刻印、開放」そして治療専用の魔術刻印を起動する。

強力な治癒魔術によつてすぐに表面上の傷は消えていく。あとは頭の傷と心肺機能の回復か・・・。

僕は集中する為に目を瞑る。そして術式の増幅を図つた。

何分かして途中経過を診るために治癒に重ねて解析を掛ける。すると頭の傷も心肺機能も回復している事が分かった。

良かつた、助かつてくれて・・・。僕は安心して治癒魔術を解き、目を開けた。そして、

・・・・綾瀬さんと田が会つた。

第十一話（後書き）

感想レビューお待ちしております。
皆様の一言が執筆の活力となります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1113y/>

魔法先生ネギま～悪の正義～

2011年11月20日03時17分発行